

『誘惑の甘い砂』

著：水月真兎

ill：香坂あきほ

「んっ……」

温かい。日だまりの中にいるような温(ぬく)もりと心地よさを感じながら、恭介は目を覚ました。

フワフワしたセーターの感触が、指先に触れている。少しくすぐったくて、なんだかひどく懐(なつ)かしい匂いがした。

(親父……?)

重い瞼(まぶた)をゆっくり開けると、蕩(とろ)けそうにやさしい笑顔が覗き込んでくる。

「おはよう、恭介……」

「ん……」

子供の頃みたいに、つい無防備に微笑みかけた恭介の唇に、熱いものが触れた。チュッと音を立てて吸われる。

「んっ、ん……」

しっとりとしたものに口(こう)腔(こう)をまさぐられて、まだ目覚めきっていない頭がぼんやり溶けていく。

(気持ち、いい……)

パジャマ代わりのシャツの裾(すそ)から入ってきた乾いた掌(てのひら)に、脇腹をそっと撫(な)で上げられ、たどり着いた薄い胸をくすぐるように愛(あい)撫(ぶ)された。

「んあっ、あ……っ！」

ささやかな突起を揉(も)むみたいに摘(つ)ままれ、ビクンと竦み上がった。その瞬間、冷水を浴びせられたように、さっと頭の霧が晴れていく。

「何しやがるっ、このド変態っ！」

怒鳴りざま、逞(たくま)しい男の胸を突き飛ばした。アマデインの長身が、見事に一回転して狭いベッドから転がり落ちる。

「ひどいな……」

「どっちがっ！」

打ちつけた頭をさすりながら床の上でぼやかれて、恭介は濡(ぬ)れた唇を手の甲でゴシゴシ拭(ぬぐ)いながら彼を見下ろした。

「こっちには入ってくるなど言っただろうが」

「淋しくて……。あの部屋、寒かったし」

まるっきり子供の言い分だ。大の男の言い訳にはお粗末すぎた。昨夜は恭介ごと殺されかかったというのに、いったい何を考えて生きているんだと頭痛がしてくる。

「知るかっ！ 添い寝してほしいなら、そういう店に行け。男でも女でも、あんたならよりどりみどりだろ」

「わたしは恭介がいい」

「はあ？」

「君が、気に入ったんだ」

軽薄すぎるアマデインの告白に、クラクラ目(め)眩(まい)までしてきた。

この顔と体で迫られたら、たいていの女は墮ちるかもしれないが、あいにく恭介はそこまで酔(すい)狂(きょう)じゃない。

「お国じゃどうか知らないが、日本じゃ相手の同意がないセックスは強(ごう)姦(かん)って言うんだ」

「キスしただけじゃないか」

「それでも強制わいせつだ」

入れなければいいとかいう程度の問題じゃないと、恭介はきっぱり決めつけた。

「朝の挨拶(あいさつ)もだめなのかい？」

「あれのどこが？」

挨拶どころか、犯(や)る気満々だったじゃないかと、アマデインを睨みつけた。

ちょっと後ろめたそうに笑うアマデイン自身も、ただの挨拶だとは思っていなかったようだ。

(やっぱり、確信犯だ……)

悪気のない天然の馴(な)れ馴(な)れしさだと見せかけて、ちゃんと相手の反応まで計算しているらしい。質(たち)の悪い男だ。

「告訴するかい？」

「しねーよ、面倒くさい」

「なら、許してくれるのか？」

「二度としなきゃな」

なんとか恭介の気を引こうとするアマデインを、素っ気なく突き放した。

こういう駆け引きが楽しい者もいるのだろうが、いくらニートでも、金と暇を持ってあました連中の火遊びに付き合うほどには暇じゃない。

「貞(てい)操(そう)堅(けん)固(ご)なんだな」

「俺は《奥ゆかしい》日本人だからな」

昨日聞かされた《奥ゆかしい》も《貞操堅固》も、いったい誰からなんの目的で習ったんだと、内心呆れながら言い返した。

「なるほど……」

思わず納得したように、アマデインは床の上でうなずいている。

「待ってろ。警察に連絡して引き取りにきてもらうから……」

いいかげん得体の知れない男の相手をするのにも疲れてきて、廃品回収にでも出すような冷ややかな声音で言った。

「警察？」

「どうせ、ゆうべの銃撃戦はとっくに通報されてる。タクシー会社も被害届を出しているだろうしな」

まったく面倒なことに巻き込まれたと胸の奥でぼやきながら、恭介は携帯の短縮ボタンを押した。

最初の呼び出しのコールが鳴り終わる前に、待っていたみたいなのタイミングで相手が出る。

〈恭介。おまえ、ゆうべは何をしていた？〉

いきなり詰(きつ)問(もん)口調で訊いてくるところをみると、恭介がアマデインの襲撃事件に関わっていると、とっくに予想していたのだろう。

ちょうど同じ時間帯に恭介が例のホテル近辺にいたことは、あそこへ呼びつけた本人である電話の相手も知っている。

「変なアラブ男に引っかかって一晩付き合わされた」

〈やっぱり……おまえか〉

呻(うめ)き声のような溜め息が聞こえる。タクシーを強奪して、街中で銃撃戦を繰り広げた弟の尻(しり)拭(ぬぐ)いを、嫌でもしなければならぬ自分の不幸を呪っているのだろう。

〈で、アマディン殿下はご無事だろうか？〉

「殿下？」

耳慣れない敬称に、恭介はなんのことだと首を傾げた。

〈アマディン・ビン・ウスマーン・ビン・ムハマド・アル・アイン殿下だ〉

「ちょっと待てっ！ ……あのおっさん、本当に王子様、だったのか？」

〈ああ、現国王の第一王子だ〉

本文 p35～44 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>